

八王寺線の中山の停車場まで三里の道程だった。

雪は降り頻った。

霏々として鷲毛に似て飛んで散亂した。

茶店の内儀さんは、昨夜の隣村の火事を知らないと言った。

オンアボギヤベイロシヤノマカボダラマニハンドマジンバラハラバリタヤウン。

新吉は頭の血を冷すように、大きな聲を出して唱へた。

警察の前に来た。

帽子もかぶらない巡査が一人走り出て、

「寸時立ち寄つて休んで行きたまへ」と言つた。

新吉は厭だつた。

巡査が三四人居た。

「君は何處から来て何處へ行くのだ、職業は何か」

「僕は荏田の學校にゆふべは泊つて火事があつたので、放火の嫌疑でもされると弱るので、横濱